

になる。支援を求めない家庭への支援では、多様なアウトリーチを機能させ、直接的な支援者をバックアップし、調整を行うことが、ソーシャルワーカーの役割となる。地域ニーズは多様であり、個別性に対応するためには、インフォーマルな関係も含めた地域社会資源を開拓することも必要である。

文 献

- 加藤曜子 (2011) 市町村虐待防止ネットワーク (要保護児童対策地域協議会) のケースマネジメント、流通科学大学論集, 23(2): 13-23.
- Lord Laming (2003) The Victoria Climbié Inquiry Report. The Stationery Office, London.

● て ● ら ● べ ● い ● あ ●

精神療法と非言語的ないし情動のコミュニケーション

(西南学院大学) 小林隆児

最近積年の課題であった母子ユニット(MIU)での臨床研究を、やっと一冊の書(『関係』からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』ミネルヴァ書房, 2014)としてまとめることができた。MIUでは母子観察にビデオ録画を用いたので、そのデータを事例ごとに数十回も繰り返し見返すという根気のいる作業を続けた。われながらよく続いたのだと感心もしたが、その作業を通して得たものが何にも代え難いほどに貴重な財産となっていることを日々実感している。それを一言で表わせば、面接において非言語的ないし情動的な動きに対する感度が格段に高まったことである。コミュニケーションを動かしているものは、言語的要素よりも非言語的要素の方が圧倒的に大きいことはよく知られているが、今回の作業では言語的コミュニケーションがむずかしい自閉症スペクトラムの子どもたちを対象とした母子臨床であったことが幸いして、この

非言語的次元でのコミュニケーション世界の豊かさとむずかしさを存分に味わうことができた。

われわれ大人は擬して非言語的次元で何が起きているかに鈍感であるが、彼らはほとんど非言語的次元の世界で生きているため、コミュニケーションのずれは随所で起こる。そのずれを丹念に解きほぐしていくことが大切であるが、そのために面接者は非言語的コミュニケーションに対する感性を磨くことが強く求められる。精神療法研究において evidence-based の流れも影響してか、いまだに患者の語り(テキスト)のみを取り上げることが多いが、現実の面接では非言語的次元で動いていることが圧倒的に多い。目に見えない、かたちとして捉えがたいものをいかにして説得力を持って語るができるか、それが今後の精神療法研究の大きな課題のひとつだと思う。